四季録

長次郎

２０１４年、宇和島市立伊達博物館で「開館40周年記念特別展」が開催された。それに合わせて、茶人、Ｋ氏の肝いりで開かれた「手に触れる　特別観賞会」に招かれた。内容は、豊臣秀吉、千利休ゆかりの茶道具と、初代長次郎から15代楽吉左衛門にいたる、楽家歴代の作品を展観するというもの。会場は、７代藩主、伊達宗紀が隠居の場所として建造した、池泉回遊式庭園の天赦園。

お茶のことなど何も知らないし、普段こういう席には二の足を踏む僕だが、長次郎の茶碗に触れることができるのかもと、重い腰を上げ出かけて行った。

園内の潜淵館に入ると、畳の上に歴代の茶碗がずらりと並べてあり、その周りを取り囲むように20名ほどの人が座っている。待つこと、Ｋ氏が板に付いた和服姿で現れた。そして、隅にいた僕にするするっと近付くと、対座して丁寧な挨拶をされる。面食らった僕はモゴモゴと言っただけ。

皆でひとしきり説明を受け、薄茶をいただき、代々の茶碗を眺めたり手に取ったり。解散となったところでＫ氏に呼び止められ居残った。「一番のお好みは？」と尋ねられる。僕は迷いなく「初代の黒楽です」と答えた。すると「ではこれでお点てしましょう」と、何と残っていた３、４人で濃茶をいただいたのである。

利休作の茶杓は僕の想像と少し違い、枯れるというより精緻に見えた。床に掛かるのは秀吉筆の軸。花入れには薄枯れたトサミズキの葉。庭に咲くのは黄色いツワブキの花。そぼ降る秋の雨。そんな空気に浸り、まさかこれで茶をいただけるとは。

帰りの道を歩きながら妄想たくましく、利休や秀吉も触れたかも？などと、４００年の時を経て２人と同席した気分にもなるのである。権威を嫌っているはずの僕が、やれやれ、時の権力者を想像しミーハーになって喜んでいる。

今のお茶の世界は利休本来の精神とはズレているのではないか。花嫁修業や教養のひとつとして広がり、家元制度のしがらみの中で、平然と着飾って茶会を開き社交を楽しむ。一期一会、侘び茶といった趣のものではなくなったように思える。

２畳や３畳の狭い空間での決闘のような茶席。一対一の人間の力の量り合い。また極上の繋がりの時間を得る場所でもあったはずだ。だが考えると、利休だって時の権力と交わり、たとえ無心で茶杓を削っていたとしても、その蠢きの中で生きてもいたのだ。

この日、Ｋ氏から注がれる眼差しは、慣れない場所でしどろもどろする僕の器量を見抜いているようでもあった。全く茶席は油断ならないのである。

（吉田　淳治・画家）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。